

FADO

23

Julho 1999

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

「聖安東ニ奥遊藝会」顛末記

6月9日から13日まで、マカオ政府観光局の招きで、マカオへ行ってきた。4月に、観光局主催のセミナーのレセプションの時、歌の合間に、「実は、私まだマカオには行った事がないのですが」という一言が引き金になっての事である。それと、今年12月20日で中国に返還になるということで、最後のポルトガルデーに、是非ファドを唄ってほしいとの全く急な要請があり、すでに予約していたポルトガル行をキャンセルした上での事だった。

覚悟はしていたものの、気温は30度を超え、90パーセントを超える湿度に、空港を下りるなり目まいがした程だ。しかし、タクシーもホテルも寒いくらいにクーラーが効いていた。蒸し暑さを想定して、袖無しのシャツという出で立ちの私は、いつも震えていた。そんな私を見兼ねてか、観光局のS氏は、急遽、マカオ市内から、橋で結ばれているタイバ島の先にあるコロアネ島のリゾートホテルへ連れて行ってくれた。

日が少し落ちるのを待って、プールで泳いだ。プールサイドで、日光浴を楽しむ人達の中、しゃかりきに泳ぐのはちょっと気がひけたが、泳ぎだすと、もう止まらない。台北での3時間程の乗り継ぎ時間で疲れた体は、おかげでしっかりと元気になった。いつもの貧乏旅行と違い、めったにない豪遊を楽しませてもらった。

食事の時が大変だった。メニューを見ても、ちんぷんかんぷん、「餃子」も「しゅうまい」も「酢豚」も「紹興酒」の文字のかけらもない。注文をするまでに、私のおなかはずーずーなりだす。英語も、ポルトガルも一切通じない。漢字で紙に書いても、くるものは全く違うもの。水も、氷も、酢も、芥子も、通じない。好き嫌いのないのはありがたい事で、でてきたものは、一応全部たべられた。ポルトガル料理もあったが、マカオから帰国して翌日にリスボンへ行く事になっていたのだから、それは、辞退させていただいた。味付けはマカオ風、いわゆる、中国、ポルトガルはもちろん、インド、アフリカの影響を受け、独自のものだ。なるほど、16世紀にポルトガル人が、港を開いて以来の、東洋と西洋の文化の出会う街らしい。

15世紀にバスコ・ダ・ガマがインド航路を開いたのをきっかけに、16世紀初頭以来、この中国南部の珠江の三角地帯にある半島は、ヨーロッパ、中国、日本とを結ぶ中継貿易の拠点として、莫大な富をポルトガルにもたらした。日本、中国への布教活動に赴くキリスト教宣教師達にとっても、重要な地であった。

珠江から流れて来る土砂で、海は青くない、おうど色だ。幼い頃のクレヨンにあった色だが、漢字で書くと黄土色と書くのかと、一人、合点する。中国大陸の大地の色と、大西洋、インド洋の海の色とが混じり合っているのだ。

中国を対岸に見下ろすバラの丘のふもとに、「媽閣廟」という寺院がある。祀られているのは女神「阿媽」の名に因んで、この地を、ポルトガル人が、「アマガオ」（阿媽の湾）と呼ぶようになったという。マカオの名の由来である。中国人の信仰する神事は、入植してきた異国人に破壊されることなく、いまだに続いているという。多分、大海を死ぬ思いで渡ってきた船乗り的心にもふれるものがあつたのだから。

旧市街と呼ばれる町並みは、細い路地が入り組み、石畳の道は、リスボンを思い出させる。大きく違うのは、出ている看板が中国語だということ。通りの名前は、ポルトガル語で付けられているにも関わらず、タクシーの運転手にさえ通じない。ホテルの名前でさえ、名所、旧跡でさえ、広東語に訳さなければ通じない。広東語での発音を書いた地図をもらったが、そのカタカナ通りに言っても、駄目。抑揚をいろいろ付けて中国語らしい発音を試みても、難しい。

450年以上もポルトガルの統治下にありながら、公用語はポルトガル語であるにも関わらず彼等は、広東語を使う。それが、マカオ人(MACAENSE)なのだ。中国人でも、ポルトガル人でもなく。

6月12日、「Arraial de St. António」という名の催しで唄う事になっていた。ポルトガルデーに因んだ催しが、4日から14日までぎっしりと詰まっていた。前日は、ポルトガル通信の取材と撮影で、初めてCDを出した時、取材を担当したフェルナンドがかけつけてくれた。その後、マカオ放送に生出演、40分程の番組だったが、生とは露知らず、編集でカットしてくれるものと、ポルトガル語につまると、「あのー、えーとなんていったらいいのかな」などという日本語混じりの番組になってしまった。

当日は、1時から、マカオ観光局の主催の午餐会、50人程のポルトガル人が、三三五五集まってきて、食事が始まったのは、2時を回っていた。こんなに、昼、集まったら、晩は誰もこないのではないかと不安になった程だ。前菜の、アスパラガスの生ハム巻きクリームソースとええに始まって、野菜スープ、海の幸のリゾット、牛のステーキ、苺とバニラのクリームと、ポルトガル本国で食べるより美味しい料理に、久しぶりのポルトガル語の洪水の中で、舌鼓を打つ。

隣に座ったのは、今回、伴奏を勤めてくれるMario Pacheco。今年45歳になるというが、12年前、リスボンのアルファマのファドのお店で初めて会った時は、青年という感じだったのに、顔ははげ上がり、お腹こそ出ていなかったが長身の風貌には、すでに、エンターテイメントとしての風格があふれていた。それもその筈、彼は、現在、アルファマの大聖堂の裏にある「João Praça CLUB DO FADO」という雰囲気はいいが、ぼかかかいつアドレストランのオーナーでもある。2度ほど行ったが、その度に二階のウエイティングバーで待たされるほどいつも盛況の様子。ポルトガルギターの腕もさることながら、なかなかの商才もあるらしい。12年前、ファドのお店で、「難船」を弾いてくれた唯一のギタリストだ。今回は、彼に選曲してもらい、「コインブラ」「かもめ」「川辺の民」を唄った。リスボンから、Camanéと、まだ20才という若手のAna Sofiaが招かれていた。

これから市内観光に向かうという彼等と一緒に、会場の陸軍クラブを出たのは4時近かった。5時に、今日のコンサート会場で、テレビの取材とリハーサルが入っているのが気掛かりだったが、彼等のマカオ廟への観光に同行することにした。マカオへ来て3年になるというテレザ女史のガイドは、度々携帯電話で中断された。マカオ廟では、めいめい線香を持たされ、お祈りしたり、おみくじ代わりの二つの数字が入っている木片を投げさせられたりして、彼等は、戸惑いながらも真剣な面持ちだった。夏の西日が容赦なく照り付け、体中から汗が吹き出て、晩のことは何とかなるような気がしてきた。

それは、大きな間違いだった。マカオの市吹奏楽団の演奏の後、ポルトガルの民族衣装をまとった民族舞踊、民謡の後が私の出番だった。喧騒は止みそうもなく、ステージの前では、子供たちが、遊び回っている。音響もひどい。私は目をつぶり、ポルトガルのテージュ河を思った。その上を一羽飛ぶ鳩を追った。長い船旅の末、この地にたどり着いた船乗りを思った。唄い終わっても、子供たちは目の前ではしゃぎ回り、人々の喧騒はやむことはなかった。ギターのマリオが、「よく唄ったね」という面持ちで私をみた。ステージを下り、用意されていたテーブルにつくなり、ワインを飲み干した。むなしかったし、悲しかったし、寂しかった。Camanéが、「しかたないんだ。いつもここはそうなんだ。ファドのお店とは違うんだ。でもよかったよ。感動している人だっているんだよ。僕もさ。」と口づけてくれた。感動した面持ちの目配せを、離れたテーブルから送ってくれる人達もいた。テレビを見て駆けつけたというアメリカ人が、慣れないポルトガル語で「信じられないけど、どうやってあなたはファドを学んだのですか」と尋ねてきたり、「ぜひ店に来て下さい。」と名刺をくれたジャズバーのオーナーもいた。終わることのない喧騒の中で、それらの会話で、いつのまにか、私の孤立感も癒されていった。帰国して、「Arraial」というポルトガル語を辞書で引いてみた。「(屋台の出た)にぎやかな場所」とあった。6月13日リスボンは町の守護神である聖アントニオの祭りでにぎわう。路地や街角には、テーブルと椅子が出され、赤や青のモールが、洗濯物の代わりに窓と窓の間に掛けられ、鯛を焼く煙でリスボン中が一杯になる。それを模してのイベントだったのだ。ちなみに、中国語では、その日の催しは「聖安東ニ奥遊藝会」と書いてあった。

E-mailより

昨日、お願いしてましたCDを受け取りました。ご連絡ありがとうございます。代金は本日振り込ませていただきました。

これって、もしかして月田さんがご自分で発送されたのでしょうか？そうですよ。嬉しいけど、でも大変ですよ。達筆ですね。「ゼビライブにも」と直筆でのメッセージがあり、感動してしまいました。ファド倶楽部ジャーナルも同封していただき、読ませていただきました。

CDは早速昨夜聴かせていただきました。ああ、これが待ちに待った月田さんの新しいCDだ！ホームページからRealPlayerで聴いた曲も全部聴ける！月田さんの「難船」も「暗いしけ」も入ってる…。まるで、砂に水がしみこむように歌が心にしみました…。ウイスキー片手に夜中まで何度も聴いてしまった。おかげで今日は睡眠不足です。でも、頭の中は心地よいです。詳しい感想はもうちょっと聴き込んでから考えましょう。今はしばらく浸ってみたいです。

思えば、2、3年前でしか、NHKラジオ「人生読本」で早朝に月田さんのお話を聞いたのが、私が月田さんのことを知ったきっかけでした。月田さんの生きる姿、端正な語り口、そして番組の中では確か「暗いしけ」だったでしょうか数小節歌われた、その歌声に心惹かれ、半分寝ぼけていたベッドの中で、感動のあまり思わず涙が溢れたのを思い出します。これもささやかな出会いのひとつでも言うべきなのでしょう。2日目の放送は出張で聴けなくて残念でしたが、先日ホームページで3日分の原稿を読めて嬉しかったです。なんと、放送で聴いた時の言葉をほとんど憶えてたのには自分でも驚きました。印象が深かったのだと思います。それにしても、良い文章ですね。(CDのライナーノートでも解

るように、月田さんは文章もいい。)

当時、それからさつそく月田さんのCDを探しましたが、カタログで見つけた後、ディスクジャンジャンの電話番号にたどり着くまで結構ヒマがかりました。結局、近くのHMVの店長が調べてくれてやっと「ファド・メノール」の入手に至りました。もう何百回聴いたでしょうか。大体どこに出張で行くときも(ほとんどアメリカですが)ウォークマンで持ち歩いています。時差ボケでも、聴くと心が落ちついて、それから眠れます。(少しアルコールが必要ですが。)

一年半ほど前に新聞記事で月田さんの活動の紹介があり、そこで「新しいCDが出来た」と書かれてありました。それから、また探したのですが、今度は何を見ても載っていない。ジャンジャンではない。そのうちにまたカタログにでも出てくるかと思ってたのですが、いっこうにその気配もなく、ほとんど諦めてたのですが、たまたま先日ホームページを見つけて今に至りました。なぜもっと早くサーチしなかったのだろうと悔やまれますが、とにかくCDは手に入ったし、ファド倶楽部のことも解って喜んでます。

昔少しバンドをやったこともあり、私はいろんな音楽にハマるのですが、月田さんのファドはいいですね。私は、ブルースやら、ラテンやら、つい最近ではCabo VerdeのMornaという音楽にもハマってました。Cesalija Evora という年輩の女性ボーカル。Cabo Verdeは旧ポルトガル植民地で、ポルトガル語の歌です。ファドに較べたら曲は軽い感じですが、やはりサウダーデを歌っていてファドに通じる響きもあるように思います。ご存じでしたか？アマリアのCD(20曲ほど入ってて、濱田さんの解説)は持ってたのですが、月田さんのファドはアマリアとは違う、月田さんのファドですね。もっと色々な人のファドも聴いてみたいと思います。ライブに行きたい。これが今の心境です。近いうちに必ずライブ行きます。月田さんのご活躍を期待してます。(土塚/H.S)

【オブリガーダ・ポルトガル！】

●それは突然のことだった。「ポルトガルへ行こう！」誰が言い始めたのか、あたりまえのように決まっちゃった。私が、ファドに、アマリア・ロドリゲスの歌声に出会ったのは、土曜日の夜の9時〜とテーマソングを石黒ケイさんが唄っていた頃の「五木寛之の夜」の番組でだったと思う。それは、20年近くも昔のことだった。アマリアのあの巻き舌の微妙な響きと、流れるようなポルトガルギターとの調べが不思議に心に残った。その後、月田さんも「五木寛之の夜」に出演、五木さんが絶賛していたのを思い出す。その深く強い歌声、哀調を帯びたポルトガルギター、私もすっかりファドに魅せられてしまった。

昨年秋、五木文庫の仲間達ではほとんどの人がファドを知らない帯広で初めて月田秀子さんのコンサートを開いた。「ポルトガル語で唄っているのに胸が一杯になるんだもの」誰かがつぶやいていた。そういう私もリハーサルの時に聴いてあふれる涙を止める事ができなかった。音楽ってすごい！と思った時、誰からともなく「ポルトガルへ行こう！」となったのです。

森岡玲子

●私と桜井さん二人は、後で合流する仲間8名より4日早く6月2日リスボンに入りました。早速翌日から地下鉄、バスを利用して、アルファマ、パイロアルト、パイシャ地区を歩き回りました。皆を連れてゆきたいレストランも見つけました。2日後フランスに留学している娘も加わってのリスボンめぐり。泥棒市では、掘り出し物を見つけて大喜び。リベルダーデ大通りの紫色の花をつけたジャカラダの並木道を歩き、エドゥワルド7世公園の古本市を見学。大変な本の数に、ポルトガル人はこんなにも本が好きなのかと感心しました。地図を片手にファドのお店を探していたところ親切な人がそのお店まで連れて行ってくれ、その上金額まで確認してくれOKのサインを送ってくれたのです。ポルトガル人の親切さを身をもって感じた旅でもありました。その夜はファドに浸りました。(月田さんのファドのほうがか打つものがあると思いませんか…)

私のガイド本はアンダーラインでよれよれになりました。ナザレ、ポルト、ブサコ、ファティマ、コインブラ、オビドス、素晴らしい旅でした。ガイドの須田さん、仲間達、夫に感謝。そして、「オブリガーダ、ポルトガル！」。

板倉恵子

●月田さんのファドに魅せられて実現したポルトガル・ファドの旅。月田さんの知人でガイドの須田さんは、穴場にも詳しく、リスボンからポルトまで8の字に回った旅は、通常のツアーでは経験できないような街や林を走り、カステラが美味しいという村のケーキ屋さんに入ったり、昼は美味しいレストランを

探していただいたりで最高！

仲間とのゆったりのおびりのわがまま旅行の最後、リスボンでの2日間は、自由に街を散策し、夜はワインと鰯をいただきながら「心の叫び」ファドをじっくりと聴きました。私には2度目のポルトガルとファド。でも月田さんはポルトガルの方に負けない美しいファディスタだと思いました。ポルトガルの人となってポルトガルの歴史と日本とのつながりを語り案内して下さった須田さん、ポルトガルの人となってファドを唄う月田さん、また、楽しくワインを飲みましょ、ポルトガルで、帯広で…。

清水禮子

●ポルトガルの北部は魅力があり、さいはてのロカ岬、中世の香りがするシントラ、絵のようなナザレ、可愛い村オビドス、皆楽しくいい気分で回って来ました。最後の2日、リスボンでファドを聴こうと大張り切り。先ずファドの知識を深めようとファド資料館へ入りました。黒い衣装を纏った歌手の素敵な写真がたくさんありました。次にはファドの生まれたアルファマ地区を散策。迷路のように入り組んだ路地にファドが流れ、鰯を焼くにおいがブーンとしてきて、まさに庶民の生活が息づいている街。日の長いリスボンの夕暮れは、どこか哀愁を帯び素敵です。ようやく暗くなって10時、ファドの始まる時間です。胸をわくわくさせながら、ファドのお店に入りました。太ったウエイトレスが注文を受けにくる。ポ語、英語、日本語で必死のおもいで料理を注文、美味しいポルトワインで乾杯！と、喜んでると、次から次へ大皿へと盛り上げられてゆく鰯。なんと48匹！言葉の通じなかった悔しさをかみしめ、次回は語学を勉強と心密かに誓いました。11時、ドイツ人、アメリカ人、イギリス人、ポルトガル人、そして私たち、いつの間にかファドファンが集まり店は超満員。3人の歌手が様々な人間模様を感情込めて唄い、辺りはシーンと静まり返り、会話も、お酒も何もかも止まり、じっと聞きほれておりました。やはりファドは最高でした。

竹島良子

●ヨーロッパには何か国か行っていますが、ポルトガル人は親切でゆったりしていて田舎者の私にはとても自然で心地よい旅でした。食べ物も新鮮な魚、ポテト、ワイン、毎日満喫しました。ファドも3軒行きましたが、やっぱり月田さんの方がいいかしら！でもきついいファドが聴けそうなので、フリーで又行きたいと思います。親切にしてくれたおじさん、おばさん、お兄さん、オブリガーダ！

桜井礼子

●初日は天気恵まれた。太陽を燦々と受けたレンガ色の赤い屋根、城やクリーム色の壁、段々に建つ家並みに青い空、美しい花々に彩られたリスボンは素晴らしい。聖母マリアが現れたといわれる奇跡の街ファティマへ行く途中、巡礼者の姿をみかけた。毎月13日に間に合うように荷物をつぎ、何日もかけ徒歩で聖地に向かうという。聖母マリア礼拝堂やバジリカで大勢の人が祈りを捧げていた。炎天下、ロザリオを手に膝をすりながら歩みを進める光景が心に残っている。

要藤朱美

ficção

読切連載
秀子のエピソード帖 [その17]
内間 天馬

秀子が密かに通うバー 秀子と酒 その3(終)

その時やはり秀子は疲れていた。全力を出し尽くしたコンサート。疲れを癒す間もない打ち上げの賑わいの中、あひとりになりたい…。サポートしてくれたミュージシャン達をねぎらった後、ひとり街に出る秀子。充実感を抱きつほんの少しの倦怠感も…。ねぐらに帰る前に私自身を少しいたわってやろう…。足は自然にあの店に向かう。いつものように谷町筋は生玉南の信号を東に折れ二つ目の信号を少し越えた左側、程近い上六の喧騒が嘘みたいな静かな一角。蔦の絡まる重厚な木のドアを押す。二十世紀初頭のフランスのガラス工芸作家ミュラーのランプ、その夢色のグラデーションが私を迎えてくれる。マダムの作り物じゃない笑顔に、私も答える。「今日は、ちょっとやさしめのを」ホテル仕込みだけど決して慇懃無礼じゃないバーテンダーの駒井君にモルトウイスキーをオーダーする。ホッと一息する。ふと奥を見るとどこかで見たことのある男…。ああ、エピソード帖の著者だわ。最近、年がいったなかなか渋い顔になって喋らなさいいい男なのに、相変わらずダサイわね、下駄なんか履いて。「あら、秀子さん今晩は。秀子さんもこの店好きですか?僕はスナックは嫌いだけどバーは好きでっせ。この店は大阪で一番気に入ってまんねん」。この店は私にとって内緒の隠れ家なんだ、やばい人間に会ってしまった。どうせ、エピソード帖に書くに決まってる、ああ今日はついてないな。「秀子さん、切り絵の世界的作家の成田一徹さんをこの店にお連れした時、ドアを開けるなりその素晴らしさに一



瞬絶句しはりまして、是非この店を作品にしたいと申し入れはりましてん。せやけどこの店マスコミには一切出まへんがな。頼んでやっどOKが出た結果、当時の「あまから手帖」に作品として出たんですわ。この店相変わらず静かで落ち着きまんねえ、ハハハ」。そうよ、だから私はここに来るの。あなたのようなお喋りが来るとこじゃないわよ、んとに。「ほんじゃ秀子さん、お先にいきますわ、ま、ゆっくりしなはれ、ハハハ」。某月某日。「シーツ、君たち、ここや、秀子さんが来る店は。ええか、この店は高歌放吟する店ちゃうちゃう、分かったか?」「ようわかりました。要するに静かにすればよろしいねんか?」「よし、ほな入るで」。一同、足音を忍ばせ、そっと中へ…。一同、蚊のなくような声で注文する。「ボク、モルトウイスキー」「ワタシ、ジントニック」「オレ、ノンアルコールデナニカ…。一同、音も立てず、しばしのひとときを…。そして、音もなくお勘定を払い、音もなく去って行こうとしたまさにその時、「あんたら、この店は、禁酒法時代の秘密バーちゃう!」でかい声は店主のマダムたか子さんでした。今回は秀子さんの内緒の場所を教えちゃったので、きっと彼女に怒られます。バーでのライブもする彼女ですが、さすがにこの店ではしたくないそうです。ほんとにホッとさせる大切な場所なんでしょうね。皆さんも内緒でそっと、でも是非訪ねて下さいね。初めての店は入りにくいものです。「フアド倶楽部通信のコラムを見て来た」と言えば20%引き!にはならんやろうねえ。そうそう、この店の名前は「ティファーナ」。

vamos cantar!

さすらいて

訳詞 Caldo Verde

あまたの地のあまたの人に別離れても
これほど心が痛むことはなかった
不安でならない 月日が流れれば
二人の絆をあなたはきっと忘れるだろう

旅立ちの度にわびしさが募る
雲が重たくたれ込めて 一点の青空もないかのようだ
あるいは深い海底に吸い込まれてゆく波にもたとえられようか
この世に愛する人ひとりいないでは
乾いた心は癒されない

もしここに戻ったとき 本当はあなたが私を忘れていたなら
辛い心を何で埋めたらよいのだろう
もう幻を追うのをやめよう
二度と別の絆を求めはしない

VAGABUNDO

Música: Alain Oulman
Letra: Luis Macedo

Já disse adeus a tanta terra a tanta gente
Nunca senti o meu coração tão magoado
inquieta por saber que o tempo vai passar
e tu vais esquecer o nosso fado

Partidas cada vez mais sombrias
cançadas são nuvens negras nem ceu azul
São ondas de naufrágio em mar fundo
No meu deserto não vejo abrigo
Sem ter um amor neste mundo

Mas se eu voltar e como penso me esqueste
troco por outro o coração amargurado
Tentarei não fazer mais castelos no ar
E nunca mais viver outro fado

informação

- ポルトガル在住の武本比登志氏の個展が下記のように催されます。
セトゥーバルへ居を定めて10年。彼の創作意欲をいまだにかきたててやまない街。今回の訪ポの際、彼の家で彼の絵に囲まれながら、カニやら牡蠣やら焼き魚やら、人参の糠漬等ご馳走になった。部屋の片隅には、アンズで作った梅干し、仕込んだ味噌の瓶が並んでいた。武本夫妻とは、セトゥーバルの市場で待ち合わせた。アンズが余りにも美味しそうだったので、買ってくる。ついでにイチジクも。とれとれの魚や、野菜が並び、安いし、リスボンよりもおじさんおばさんも優しく買い物をしやすく大好きな市場の一つだ。毎朝買い出しに出掛けるという武本夫妻がうらやましい限り。
武本比登志ポルトガル作品展—赤瓦と白壁に魅せられて—
9月2日(木)~7日(火) 大阪・高島屋6Fアートサロン
- 会員でもあり、ユパンキの密かなファンで自らギターの弾き語りもする茅野氏が、積年の念願をかなえ、3月から「バー・フェデリコ」というお店を始めました。7月9日(金)8時からファドライブをします。茅野マスターに強引に自己宣伝をしてもらった。曰く「『男の隠れ家』という月刊誌があるが、フェデリコはいわば『大人の隠れ家』と呼ぶにふさわしい、落ち着いたバーである。マスターはラテン大好き人間で、もちろんファドのファンでもある。だからBGMはほとんどがラテン系で、時にはマスターの弾き語りも入る。メキシコ風、スペイン風のフードアイテムも幾つかあり、食事もOK。7月9日のライブを機に、ひそかな「行きつけの店」とされてはどうだろうか。」
- 6月から「アートクラブ」は、移転して新しいお店でのライブです。ミナミのど真ん中、笠屋町筋と八幡筋の南東角、山田第二ビル4階。お間違えのないように!

<月田秀子のスケジュール>

7月 3日(土)	東京・銀座「アルテ・リーベ」	* 要予約 tel:045-713-6277 (斉藤)
7日(水)	大阪・南方「三裕の館」	* 問合わせ tel:06-6304-1745
9日(金)	大阪・心齋橋「バー・フェデリコ」 上記参照	* 問合わせ tel:06-6211-7388
26日(月)	大阪・心齋橋「アートクラブ」 上記参照	* 問合わせ tel:06-6253-0827
29日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	* 問合わせ tel:075-361-3535
8月 2日(月)	和歌山市「鷺の森別院」	* 主催わ・カルチャー tel:0734-22-1888
4日(水)	大阪・南方「三裕の館」	
22日(日)	福島「アンナガーデン」	* 問合わせ tel:0245-93-0839
23日(月)	福島・岳温泉「ざくろ館」	* 問合わせ tel:0243-24-3968
26日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	
30日(月)	大阪・心齋橋「アートクラブ」	
9月 1日(水)	大阪・南方「三裕の館」	
19日(日)	熊本「熊本市民会館」	* 問合わせ tel:096-355-5235
24日(金)	丹波篠山「観月会」	
27日(月)	大阪・心齋橋「アートクラブ」	
30日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	
10月 2日(土)	愛媛「梅錦・酒蔵コンサート」	
6日(水)	大阪・南方「三裕の館」	
21日(木)	札幌「道新ホール」	* 問合わせ tel:011-621-8610 (らむれす)
22日(金)	函館「金森ホール」	* 問合わせ tel:011-621-8610 (らむれす)
	25日のアートクラブは、お休みさせていただきます。	
28日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	
11月17日(水)	大阪・桜橋「サンケイホール」	
26日(金)	東京・王子「北とびあ」	

<編集後記>

リスボンから帰国後、慌ただしく23号の発行となりました。梅雨が明ければ本格的な夏。リスボンのカラッとした夏が恋しい!それでも、レストランやバスにも空調が完備されつつある。クーラーの吐き出す熱気で、なお一層暑さを増す都会の仲間入りだけはないでほしいと祈る。

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.osk.3web.ne.jp/~fh/index.htm>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第23号
- 1999年7月1日発行 (季刊:年4回発行)
- 編集 発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒542-0072 大阪市中央区高津1-3-6
- TEL&FAX 06-6762-3411